



教育の現場にて

著者	得居 千照
雑誌名	教育を考える一言
巻	3
ページ	31-31
発行年	2013-06
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124004

教育の現場にて

1. 教育を考える一言

「目の前にいる生徒は毎日を生きている」

2. 背景

この言葉は、私の母校である東京都立富士高等学校にて教育実習をした際、指導教諭の先生がかけて下さったものである。教育実習では、社会科公民科倫理の授業を担当させていただいた。先生は公民科倫理の先生であり、学級運営だけでなく倫理の授業においても多くのご指導をいただくことができた。その中の一言である。

現行の公民科倫理の内容を教科書でみると、主要な哲学者や思想家の名前が太文字で印字され、それに関する出来事が羅列された思想史中心の構成となっている。これに即して、行われている授業や試験は、教科書に書かれている思想史についての説明が展開され、試験では思想史の暗記が要求されている。実際に私が高校生のかに受けた公民科倫理の授業も例外ではなく、思想史が羅列された教科書の内容についての説明を一方的に受け、試験では思想史を丸暗記することが求められ、「倫理ができる」とはそのような思想史を詰め込んだ状態であるとされていた。

授業者により同じ学習内容であっても授業展開が異なることから、哲学者や思想家の説明に濃淡があることは明白だが、根本的に現行の公民科倫理は思想史中心の暗記科目に留まっていると言える。「公民科倫理が暗記科目であっていいのか。」この疑問から、私の視点は「制度」に向けられた。社会科の科目編成に問題があるのではないか。科目名がなぜ「倫理」なのか。倫理学との違いはどこにあるのか。以上のように「制度」についての問題点ばかりが頭に浮かぶ中、授業を構成する際に心に響いた一言が「目の前にいる生徒は毎日を生きている」である。

3. 考察

公民科倫理で得ることのできる哲学者や思想家の知識は、哲学や倫理学に興味がある私からするとその話を聞いているだけでワクワクするような楽しい内容である。しかし、興味のない人からしたらとても退屈で苦痛なことかもしれない。しかし、哲学や倫理学を理解する上で、多少なりとも過去に思想史を知識として知っていることは欠くことのできない要素である。そのため、現行の公民科倫理で行われている思想史学習を完全に否定しているわけではない。これから問題とし、目の前の生徒に働きかけることは、「公民科倫理を暗記科目で終わらせない」ということである。そのためにはどのような公民科倫理の授業をすることができるか。この課題は今の研究に繋がっている。

公民科倫理のあり方について考えていたときにいただいた言葉であるため、目の前にいる生徒への授業を考えるきっかけになったことは前述の通りである。しかし、この言葉は教員として実際に学校現場で働く上でも意味のある言葉であると考えている。「制度」に関して悩まされることは、教科の編成や学習内容についてだけではない。実際に教員になった場合、教員の勤務形態など目に見える制度だけでなく、教員として求められるあり方や対応の仕方など目に見えない「制度」と衝突することがあるかもしれない。そんなときも、教員として教育を考えるということは、目の前で毎日を生きている生徒を考えるということであるため、この一言を大切にしたい。もしかしたら、自分が働きかけることのできる範囲から遠くの「制度」を変えることができるかもしれないという希望を込めて。